

ロラン・バルトのテキスト理論について(II) : 鑑賞学の基礎づけのために

著者	吉川 登
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	41
ページ	79-87
発行年	1992-09-30
その他の言語のタイトル	Une Etude sur la Theorie du Texte de Roland Barthes (II) : A la recherche de la science de l'appréciation d'art
URL	http://hdl.handle.net/2298/974

ロラン・バルトのテキスト理論について (II)

鑑賞学の基礎づけのために

吉川 登

Une Étude sur la Théorie du Texte de Roland Barthes (II)

À la recherche de la science de l'appréciation d'art

Noboru YOSHIKAWA

(Received May 25, 1992)

はじめに

読書の科学, とでも言うべきものが, あってもよいのではないかとロラン・バルトは提言している¹⁾。鑑賞の学をテーマとする我々にとって, バルトのこの提言は刺激的である。

ともあれ, 読書=鑑賞が, 学的考究の対象となり, またそれ自身が一個の「科学」となりうるためには, いくつかの前提が必要だろう。その前提の一つは, 意味生産の形態がもはや作者中心に考えられるのではなく, 広義の「読む」行為に力点を置いて考えられる, ということである。これにより, 読書=鑑賞は, 旧来「創ること」にのみ与えられていたものと同等の地位を要求しうることになり, 従って当然, 研究するに値するものとなるのである。第二の前提は, 「作品」における意味作用の形態が一義性の論理から自由になる, ということである。このことから作品は, 送信者(作者)の意図(メッセージ)を受信者(読者)へ送るという一方的回路ではなく, 受信者の(意味作用レベルにおける)能動的関与を要求する可逆的・多方向的回路となる。要するに, 「作品」は「テキスト」となるわけである²⁾。従ってここに, 「作品」の科学(ないしは「作者」の科学)ではない, 新たな「読書=鑑賞」の科学が要請されるゆえんがある。さて, 「作品」のテキスト化, 意味生産における「創ること」と「読むこと」の等価性といった事態は, 新たに「読み」の主体の問題を提起することになった。意味作用が意識ないし意図のレベルでの, 作者から読者へのメッセージ伝達ではもはやないとすれば, その限りにおいて, 「読み」の主体(同時に「つくる」主体)は, もはやデカルト的エゴ・コギトにとどまるものではありえない。この「読み」の主体に対する新たな認識が, 鑑賞学のための第三の前提である。

ロラン・バルトの「テキスト理論」は, 以上の三つの前提をすべて視野に収めているようにみえる。私見によれば, 美術における鑑賞学の成立は, 「鑑賞すること(読むこと)」と「鑑賞する主体」に関するダイナミックな理論を前提とするが, バルトの「テキスト理論」は, そのために参照すべき, 有効な一つのモデルを提供しているようにみえる。

1 古典的テキスト概念とその危機

ロラン・バルトによれば, 世間の常識にとっては, テキストとは, 要するに書かれたものこととであり, それは, なるべくただ一つの安定した意味を読みとらせるように配列された, 語の織物³⁾である。このような, テキストについてのごく常識的な見解は, 古典的なテキスト概念に基

づいている。そして、古典的な意味でのテキストは、記号を中心にして形づくられる概念的集合に属し⁴⁾、つまりは、ヨーロッパ特有の記号の制度、要するに古典的記号学に基づいているのである。〈(古典的な)テキストの概念は、書かれたメッセージが記号と同じように分節されている、ということ的前提とする。つまり、一方に記号表現(文字や、文字をつなぎ合せた語、文、パラグラフ、章などの物質性)があり、他方には記号内容^{シニフィエ}がある、ということである。このシニフィエは、根源的、一義的、決定的な意味であると同時に、それを伝達する記号を校訂することによって決定される。古典的な記号は、閉ざされた一個の単位であって、その囲いは、意味を停止させ、意味がふるえたり、分裂したり、さまよったりするのを防ぐ。古典的テキストの場合も同様である。古典的テキストは、作品を閉ざし、作品をその定義にしばりつけ、そのシニフィエに釘づけにする⁵⁾のである。

このように、古典的テキスト概念は、意味論的にみれば、徹頭徹尾、一義性を志向する、ということによって特徴づけることができよう。ここから、「復元」と「解釈」という、一義性を確保する二つの方法が生れる。「復元」とは、シニフィエの物質性(文字の順序と正確さ)が何らかの理由で失われた時、それをかかっての姿に回復する操作であり、「解釈」とは、「復元」によって確保されたシニフィエから規範的なシニフィエ=意味を導き出す作業である。

古典的テキスト概念は、上述のことからも判るように、認識論的には、〈真実の形而上学⁶⁾〉(ただ一つの真の意味を事象の背後に設定する考え方)と密接に結びついている。この形而上学は、プラトンのイデア論以後、さまざまに姿を変えながら、二千年以上にわたってヨーロッパに君臨し、ヨーロッパ人の思考形式を規定しつづけたものである。古典的テキスト概念=古典的意味論の一義性志向は、真実の形而上学の確実性・真実性志向に基づいているのである。

しかし、十九世紀後半、古典的記号の制度および「真実の形而上学」が批判にさらされ(ソシュールとニーチェによってである)、危機をむかえるとともに、古典的テキストの安定性も揺らぎ始める。古典的テキスト概念の危機=変動は、バルトによれば、直接的には言語学によってもたらされたものであった。その際、言語学が果たした役割は、バルトによれば、次の三つである。(1) 真実という規準を有効性という規準によって置き換えること、あらゆる言語活動を内容に基づく認可から救い出すこと、言語の同語反復的な変換の豊かさと微妙さ、さらには無限性とを探求すること、など、要するに形式化を实践すること。(2) 文学の一部が詩学という名称の下に言語学の領域へと移されたことに見うけられるように、言説の伝統的な分類区分が大胆に修正されたこと。(3) 1960年頃からようやく発達しはじめた新しい学問、記号学が、(これまで言語学が扱いかねていた)文学的言説の分析に向かったこと。

言語学における形式化の徹底、および言語学と文学の越境的交渉、そして文学の記号学の登場、これらが新たなテキスト概念を要請することになる。〈厳密な文学の記号論においては、テキストとは、いわば種々の言語現象を形式的に統合するものである。テキストのレベルにおいては、まさに意味作用の意味論的組織や物語ないし詩の統辞法が研究されるのである⁷⁾。〉

だが、この文学の記号論におけるテキストは、確かに新たな方向を示すものであるとはいえ、依然として実証科学の諸原理に従うものであり、認識論的な意味での変動はそこには生じていない。バルトによれば、〈認識論の変動が始まるのは、言語学や記号学の成果が、何よりも二つの異なるエピステーメ、つまり、弁証法的唯物論と精神分析学の相互乗り入れによって規定された、ある新しい参照の場に断呼として据えられる(つまり、そこで相対化され、解体=再構築される)とき⁸⁾である。つまり、新たなテキスト概念は、〈相異なるエピステーメ、いやさらに、一般には互いに未知のエピステーメが会う⁹⁾〉とき初めて生まれるのである。

2 新たなテキスト概念の諸特徴

上述の意味での新たなテキスト概念は、バルトによれば、次の五つの特徴を持つものとされる。つまり、記号表意的実践、生産性、意味生成(シニフィアンス)¹⁰⁾、表層テキストと深層テキストの弁別、相互関連テキスト、である。

(1) 記号表意的実践

バルトによれば、〈テキストは記号表意的実践である¹¹⁾〉。ここで、記号表意的実践という耳なれぬ用語で意味されているのは、テキストが、一方で、記号学的な意味作用に従うが、同時にそれは〈一つの実践〉でもある、ということである。テキストにおいては、意味作用は、静態的な抽象のレベルにおいてではなく、ある労働に従って生産¹²⁾される。そして〈その労働には、主体と他者との葛藤や社会的コンテクストが投入される¹³⁾〉のである。このような実践においては、認識は了解を意味せず、意味作用に関わる主体は、もはや古典的主体、〈統一のとれたデカルト的コギト〉ではありえない。それは、〈複数の主体¹⁴⁾〉であり、この種の主体概念に近づきえたのは、精神分析学のみである。テキストは、古典的形而上学によって保持された古典的主体を解体し、複数の主体(ないしは主体の複数性)を現出させるのである。〈複数性は、……記号表意的実践の中心に据えられる¹⁵⁾〉のである。

(2) 生産性

バルトによれば、テキストは、生産性であり、産物ではない。テキストは、実践であると同時に、生産行為なのである。作品が産物であるとするれば、テキストは作品と同じものではない。つまり、〈テキストは、すでに書かれている(固定されている)のに、働くことをやめず、生産過程を維持することをやめない¹⁶⁾〉のだ。テキストは、本質的に、産物として固定されないもので、常に産出しつづける労働なのであって(その労働の主体は複数の主体である)、バルトは、〈実際、疲れを知らずに働くのはテキストであって、芸術家や消費者ではない¹⁷⁾〉とまで言っている。芸術家=作者が、古典的主体概念の下に、自己を表現したり再現したりすると信ずる限り、テキストは出現しない。テキストという生産行為が産出するのは、古典的主体が産出すると信じているものとは異っている。つまり、〈テキストは、(個人的ないし集団的な主体が何かを模倣したり自己を表現しているという錯覚をいだきかねないとき)、コミュニケーションや再現や表現のための言語を解体し、もう一つの言語を再構築する¹⁸⁾〉のである。テキストが再構築するこのもう一つの言語は、深層の言語、もしくは我々の深層意識に対応する言語、複数の主体の言語、と置きかえることができるかも知れない¹⁹⁾。我々の意識的自我が壊乱し、その結果現れる複数の主体が、一義的なコミュニケーションの言語を錯乱させ、一見無意味化させるとき、テキストが出現するのである。〈テキストが出現するのは、例えば、書き手ならびに・または読み手が、シニフィアンと戯れはじめ、(それが作者なら)たえず「ことばの遊び」を生み出し、(それが読者なら)遊戯的な意味を考え出すときである。たとえ、テキストの作者がそうした意味を予想していなかったとしても、またたとえ、そうした意味を予想することが、歴史的に不可能であるとしても、それを考え出すときである〉。

(3) 意味生成

テキストが(記号表意的)実践であり、生産性であるという規定は、意味生成(Signifiance)^{シニフィアンス}という規定と通底している。

古典的なテキスト概念を支配しているのは、テキストが(一個であれ数個であれ)真の意味を保有しているという信念である。〈テキストは、あたかも一個の客観的な意味作用を保管している

かのように扱われ、その意味作用は、生産物=作品の中に、まるで防腐保存されているかのように見える²¹⁾のだ。しかし、〈テキストが(もはや生産物ではなく)生産行為とみなされるようになると、そうした「意味作用」はもはや適切な概念ではなくなる²²⁾〉、とバルトは言う。テキストが産物ではなく生産行為であり、実践=労働であることを、常に我々は念頭に置かねばならない。ここから、固定的な、一義的な、「真の」意味作用という考え方は、テキストにはふさわしくない、ということが当然帰結するだろう。テキストは、それが(生産)行為である限りにおいて、常に、意味的に揺らいでおり、本質的に多義的な意味空間を発出させるのである。従って、テキストには、〈意味作用の複数化〉や〈共示的意味の概念、つまり第二次の、派生的な、連合されたさまざまな意味のヴォリューム、外示的意味作用によるメッセージに接ぎ木されたさまざまな意味論的「揺れ」のヴォリューム²³⁾〉といった考え方は、当然ながら、常につきまとうのである。つまり、ここで、意味作用の二つの次元とでも言うべきものが弁別されねばならないのである。一つは、古典的なテキスト観に由来する意味作用であり、〈生産物の、言表の、コミュニケーションの次元に属する意味作用²⁴⁾〉である。これに対し、新たなテキスト理論は、もう一つの意味作用の次元を発掘した。つまり、〈生産行為の、言表行為の、象徴化作用の次元に属する記号表意的労働(としての意味作用)²⁵⁾〉である。この後者の意味作用=労働を、バルトは、意味生成と呼ぶこと^{シニフィアン}によって、前者の意味作用から明確に区別しようとした。

そして、重要なことは、意味生成という規定においても、テキストは、古典的主体の壊乱=主体の複数化と密接に関与している、ということである。〈意味生成とは、テキストの「主体」が、エゴ・コギト(我思う)の論理をのがれて、他の論理(シニフィアンの論理や矛盾対立の論理)に巻き込まれ、意味と格闘し、自己を解体してゆく(自己を見失ってゆく)一つの過程である²⁶⁾〉。今や、意味生成は意味作用と対立する概念であり、意味作用が古典的自我の言語に対する制御活動であるとすれば、意味生成はそのような自我の解体・喪失の過程なのである。意味生成という〈過激な労働〉においては、〈主体は自分が(言語を監視する代りに)言語の中に入ってゆくと、言語によってどのように働きかけられ、解体されるかを探る²⁷⁾〉。従って、〈意味生成は、意味作用とは逆に、コミュニケーションや再現に還元することができない²⁸⁾〉。意味生成は、〈(作者の、読者の)主体を、テキスト内において、投影としてでなく、喪失として位置づける²⁹⁾〉のである。古典的主体は、この喪失において、多数性へと分散=解体する。硬い同一性の皮膜が破れ、水流が喪失=伏没するように、流体状の複数の自己へと砕けることは、強いエクスタシーを伴う。〈意味生成と享楽との同一化が生じる〉のはこの時点においてであり、〈テキストがエロティックになるのはまさに意味生成の概念による³⁰⁾〉とされるのも、この故にである。

(4) 表層テキストと深層テキスト

意味作用と意味生成の弁別は、表層テキストと深層テキストの弁別に対応する。テキストには二つの次元があり、それぞれ、表層テキスト、深層テキストと呼ばれる。

表層テキストとは、〈具体的な言表の構造の中に出現するとおりの言語現象〉(クリステヴァ)であり、〈記号の、コミュニケーションの理論に属することができ³¹⁾〉、それ故、それは専ら記号学の対象である。従って、表層テキストの分析には、〈音韻論的、構造論的、意味論的記述、つまり構造分析³²⁾〉を用いればよい、ということになる。これに対し、深層テキストは意味生成の場であり、言表ではなく言表行為が関与する。深層テキストにおいては、言表そのものではなく、言表行為の主体が〈どのように転位し、偏向し、見失われるか³³⁾〉ということが問題になる。テキストの主体に関する問題は、表層テキストのレベルでは顕在化しない。しかし、この、深層テキストが構成する言表主体は、言うまでもなく、もはや統一的な古典的主体ではない。それは複数化さ

れた主体である。従って、深層テキストを分析するためには、構造分析だけでは十分ではなく、今日の精神分析学が見出した主体についての知見が、つまりは構造主義と精神分析学の結合体としての記号分析学セマナリクスが必要とされるだろう。〈言語に関係すると同時に欲動に関係する³⁴⁾〉というこの二重の関与において、深層テキストは、言語学と精神分析学のエピステモロジックな交差の場として読まれねばならない。

(5) 相互関連テキスト

〈あらゆるテキストは相互関連テキストである³⁵⁾〉。言いかえれば、〈あらゆるテキストは、過去の引用の新たな織物である³⁶⁾〉ということになる。要するに、どのようなテキストも、自律的でも独創的でも純粹でもありえない。あらゆるテキストのさまざまなレベルに〈他のテキストが、多かれ少なかれ識別しうる形で存在する³⁷⁾〉のである。一つのテキストは、すでに常に複数であり、多数体である。一つのテキストの中では、〈先行する文化のテキストや周囲の文化のテキスト〉が流れ込み、解体＝再構築され、再編されるのだ。しかし、これは〈影響や源泉の問題に還元されるものではない³⁸⁾〉。なぜなら、相互関連テキストにおいては、意識的な借用や影響関係よりも、無意識的ないし無意図的なテキストの流入が活動するからである。つまり、〈相互関連テキストは、稀にしか起源を標定しえない匿名の決まり文句、引用符なしに行われる無意識的な引用、などを含む普遍的な場³⁹⁾〉なのである。意図的な模倣や意識的な借用が再生産性にかかわるものだとすれば、テキストは生産性のステイタスを保持しつづける限り、起源も系譜も標定することが困難な、無意識的な言語再編行為に属する、ということになる。

以上のような諸特徴をそなえたテキストを、バルトは、「織物」や「蜘蛛の巣」にたとえている。

「織物」の比喻によって喚起されるのは、(開かれた)多数多様体としてのテキストのイメージである。つまり、テキストは、さながら織り物のように、〈その織り方において、また、コードや決まり文句やシニフィアンの編み目において⁴⁰⁾〉見られねばならない。織物は、多数の織り糸と多様な織り方によって多方向に織りなされた複合的な多数多様体なのである。

これに対し、「蜘蛛の巣」という比喻が喚起するイメージは、テキストの主体の複数性のイメージである。テキストの主体は、テキストという織物の〈編み目に身を置き、解体される〉。〈ちょうど、自分の巣の中で自ら溶けてゆく蜘蛛のように⁴¹⁾〉。つまり、テキスト生産においては、主体は、古典的主体の有する自己同一性(単一性)を喪失し、その輪郭を開き、複数性へと溶解してゆく。そこに現れる主体は、無意識の欲動⁴²⁾のうねりに対応する、波頭のように現れてはその形を変貌させる、複数の主体である。

「織物」と「蜘蛛の巣」を共に意味するイフォス(hyphos)という用語を用いて、バルトは、次のように述べている。〈新語法を好む人なら、テキスト理論を、イフォス論(hyphologie)として定義することもできよう⁴³⁾〉。

3 享楽・生成の科学としてのテキスト理論

(1) 古典的意味論とテキスト理論

テキストは、「織物」として、本性上多数的であり、多義的である。テキストのこの多義性を支えるテキスト生産の主体は、複数化された自己、つまり主体の複数性である。

このような「多義性」と「複数性」が成立する場合は、我々の無意識であり、その意味で、〈テキストの働きは夢の働きに似てくる⁴⁴⁾〉のである。テキストのこの「多義性」と「複数性」は、〈意

味に関する伝統的なイデオロギー〉(これを仮りに古典的意味論と呼ぼう)と真向から対立することは明らかである。なぜなら、古典的意味論は、真実の意味、唯一の意味を志向し、その意味を「表現」するのは、単一の意識的な「自我」、一個の「人格」である、と想定するからである。このことによって、古典的意味論は、一方の極に「表現」する「作者」、他方の極に受容し・消費する「読者」という、一方向的且つ一義的な送信・受信関係を樹立したのである。送信される「意味」は、「作者」の「表現意図」であり、この「意図」は、徹頭徹尾、意識のレベルでのみ構成されたものである。古典的意味論における送信・受信関係の図式においては、無意識のレベルが排除されているばかりでなく、「読者」も無視されているのである。「読者」は、そこでは、まったく受動的な役割しか与えられず、テキストの意味解読作業において、飼い犬のように、主人＝作者の指令通りにしか動くことができないのだ。テキスト理論は、古典的意味論の支配下における、「読者」の隷属を廃棄する。これにより、読書の地位向上がもたらされる。この間の事情について、バルトは次のように書いている。〈テキスト理論は、種々のジャンルや芸術の区分を廃止しようとするが、それはテキスト理論がもはや作品を、単なる「メッセージ」、あるいはさらに「言表」(つまり、いったん発話されるや、その運命が閉ざされてしまう有限の産物)とは見なさず、たえざる生産行為、言表行為とみなすからである。主体はそうした言表行為を通してたえず自己と格闘する。その主体は、なるほど作者の主体かもしれぬが、しかしまた、読者の主体でもあるのだ。それゆえ、テキスト理論は、ある新しい認識論的対象、つまり読書の地位向上をもたらす⁴⁶⁾。原理的に、テキスト理論によって、〈読書の自由は無限⁴⁶⁾〉なものとなる。

(2) 読むことと書くことの等価性

テキストの出現においては、「読むこと」は、受動的な消費活動に終るのではなく、「書くこと」と等価な活動となる。そもそも「書くこと」は、広義の「読むこと」ではなかろうか?我々は、基本的には、読みのルールに従って書くのであり、常に読みながら書いているのである。「書くこと」は、「読むこと」を前提とし、「読むこと」を常に同伴している、といえよう。「書くこと」は、「読むこと」の多数の生産的可能性の中から選択された一形態にすぎない。それゆえ、「書くこと」は、受動的でない「読み」、つまり、生産的・能動的な「読み」であるといえる。要するに、書くことは読むことなのである。テキストは、生産的・能動的な「読み」が成立する場、に他ならない。

このように、テキスト理論においては、書くことと読むことは、その生産性において等価である。換言すれば、「読むこと」は、それが生産的である限りにおいて、「書くこと」に等しい、ということである。〈十全な読書とは、読者が書こうと欲する者以外の何者でもなくなり、言語活動のエロスの実践に身をゆだねようとする読書である⁴⁷⁾。

(3) メタ言語の廃棄

書くこと読むことの等価性という考えは、必然的に批評という在り方を不可能にする。批評が依拠している実証的科学(歴史学・文献学)に共通する態度は、〈作品を、離れたところにある閉じた対象として設定し、観察者はそれを外部から検討する⁴⁸⁾〉というものである。つまり、批評的言説は、作品に対して、常にメタ・レベルに立つことを前提としている。しかし、テキストという生産性の中では、いかなる言語活動も他の言語活動の優位に立つものではなく、メタ言語は存在しない⁴⁹⁾のだ。従って、バルトの言う「批評の神話」に対してテキスト分析が異議を唱えるのは当然である。〈批評の神話によれば、作品は、純然たる進化の運動の中でとらえられることになり、あたかも、作品の父となる作者の(市民的、歴史的、情熱的)人格に、常に結びつけられ、帰属させられなければならないかのようになる。テキスト分析は、親子関係の隠喩、有機的「発

達」の隠喩に対して、網目、相互関連テキスト、多元決定された複数的な場、などの隠喩を好む)。〈批評は、一般に作品の意味を発見しようとして、その意味は、多かれ少なかれ隠されていて、それぞれの批評により、さまざまなレベルにあるとされる。これに対して、テキスト分析は、最終的な記号内容という考えを拒否する。作品は停止せず、閉鎖されない。従って、少なくとも、説明すること、あるいはさらに記述することよりも、記号表現の戯れの中に入ってゆくことが問題なのである⁵⁰⁾。などと、バルトは、「批評」と「テキスト分析」を対比的に論じている。つまり、批評は、(1) 作品の意味=最終的な記号内容=一義性、および(2) そのような意味=最終的なシニフィエの設定者としての作者=人格の統一性(単一性)というイデーを前提にしつつ、同一性の形而上学に依拠している、ということが判る。これに対し、〈テキスト分析は複数主義的⁵¹⁾〉である。作品のレベルにおいても作者のレベルにおいても、テキストにおいては、作品は、閉じられたものではなく、多数の新しい意味産出へと開かれたものとなり、バクテリアのように意味を増殖しつつける活動体となる。また、テキストの出現とともに、作者は、「読むこと」の生産的な形式である「書くこと」という活動の中で、おのれの複数の自己へとつれ出され、デカルト的自我の喪失を享受するのである。

テキストの出現においては、何人もテキストの外部に立つことはできない。テキスト理論にとって、メタ言語は存在しないのだ。〈注釈ですら一個のテキストとなる〉のである。〈もしある作者が過去のあるテキストについて語ることになったとしたら、そのときは、自ら新たなテキストを生産すること(相互関連テキストの無差別な増殖作用を開始すること)によってしか、語ることはできない⁵²⁾〉。批評家はもはや存在せず、ただ、(読みの生産的な形式としての書くことに従事する)作者だけが存在することになるのである。従って、〈テキスト理論は、その原理そのものからして、理論家か実践者(作家)しか生み出すことができず、専門家(批評家、教師)は決して生み出さない⁵³⁾〉。専門家(批評家・教師)は、同一性の形而上学が成立する限りにおいて可能なステイタスにすぎない。

(4) 享楽・生成の科学

テキスト理論は、同一性の形而上学・古典的意味論に基づく諸科学に対して、独特な位置関係にある科学である、と言わねばならない。先ず、〈作品の伝統的な諸科学は、内容ならびに・または字句の科学であった——そして今なおそうである——が、これに対してテキスト理論は、形式主義的な言説を行う⁵⁴⁾〉、という点にテキスト理論の独特な位置がある。つまり、テキスト理論は、形式主義であることにおいて、古典的意味論に基礎をおく諸科学に対し、批判的な位置に立つのである。だが次に、〈テキスト理論は、形式主義的な諸科学(古典論理学、記号学、美学)に対しては、自己の場に歴史や社会を(相互関連テキストという形で)再導入し、主体を再導入する(がしかし、その主体は、無意識の現前=不在によって、たえず分裂し、転位し——解体される——主体である)⁵⁵⁾〉、という点において、テキスト理論の独特な位置が認められる。つまり、テキスト理論は、歴史・社会・主体を再導入することにおいて、古典的意味論と相補関係にある古典的形式主義的諸科学に対し、批判的な位置に立つのである。要するに、テキスト理論は、批判的な科学である。

古典的な諸科学は、普遍的なものの科学か個別的なものの科学か、いずれかに属する。だとすれば、古典的な諸科学に対し批判的な位置に立つテキスト理論の積極的な規定は、一体どうなるだろうか。バルトによれば、テキスト理論というこの科学の特殊性を説明するものとして、次の二つの述語がふさわしい、という。第一の述語=規程は、テキスト理論は享楽の科学である、というものである。〈なぜなら、(意味生成の場に入った)あらゆる「テキスト的な」テキストは、

究極的に、主体がエロスの享樂の中で完全に引き受ける意識の喪失（無化）を、引きおこしたり味わったりしようとするから⁵⁶⁾である。この規定は、私見によれば、テキストの隠喩「蜘蛛の巣」の指す内容に相当するもので、主体の複数化に関わる。つまり、「読み」の主体は、複数化する限りにおいて享樂し、テキスト理論＝実践は、複数化した主体による複数化の享樂の精緻化という形をとることになるだろう。

第二の述語＝規定は、テキスト理論は生成の科学である、というものである。バルトは、〈我々は、生成の恐らく絶対的な流れを知覚するほど精妙ではない〉に始まるニーチェの言葉を引用しつつ、一見不変に見えるものにおける生成の相を知覚するようにすすめている。私見によれば、この第二の規定は、テキスト理論のもう一つの隠喩「織物」のイメージの示す内容に相当するもので、テキストの複数性（多数性）に関する。我々の粗雑な器官は織物を見るが、編み目はとらえない。織物の多数の糸は、重なりあいながら縦横に走り、あらゆる方向に向かって開かれている。〈決して占有化されず、諸コードの無限の自由交通のうちに存在する⁵⁷⁾〉テキスト＝織物は、それを織りあげている多数・多様体が知覚される限りにおいて、生成するものとして現れる。テキスト理論が生成の科学と言えるのも、この意味においてである。つまり、テキスト理論は、固定した単一な個体＝作品の中に、多方向に開かれた多数多様な働きと流れを見る精妙な知を要求するのである。

おわりに

以上、ロラン・バルトのテキスト理論の概略をたどってみたが、この理論が美術の鑑賞学にとって有する意義について考えてみたい。テキスト理論は、作者・作品・鑑賞者の関係について、近代的な考え方の変更を要求していると思われる。

まず、作者・作品関係に関してであるが、テキスト理論以後は、我々は、もはや、「作品」を「作者」の「自己表現」として考えることはできない。「作者」の「自己」（あるいは表現意図）を、制作に先立って設定することは、もはやできないのだ。

第二に、作者・鑑賞者関係についての考え方も、変更を要求される。「作者」はその「メッセージ」（作品）を「鑑賞者」に伝達するという、一方向的な送信・受信関係は、テキスト理論以後は、もはや成り立たない。「鑑賞者」は、「メッセージ」の意味を「解説」し、規範的な意味を割り出すという受動的な消費者の役割にとどまっていることは、もはやありえない。

第三に、鑑賞者・作品関係である。テキスト理論以後、鑑賞者は、もはや意味の消費者の立場にとどまることはできず、作者と同様、意味の産出者の側にまわる。「作品」が「テキスト」へと変貌し、生産性の場へともたらされるとき、「作品」はもはや、「作者」の「自己」という最終的シニフィエをもつシニフィアンではなく、「織物」にたとえられるような、多数多様性となる。この多数多様体にかかわるとき、それが作者の「自己」であれ、鑑賞者の「自己」であれ、複数性へと解体・分散・溶解せざるをえない。鑑賞行為は、テキストの多数性の出現（つまり複数の主体の出現）において、もはや受動的・消費的ではなく、創造的となる。鑑賞者が創造的な意味産出の場に立つことこそ、鑑賞学の成立の前提となる。そして、この、創造的な鑑賞＝「読み」⁵⁸⁾は、その生産性、実践性、意味生成において、制作＝「つくること」と通底するのである。

註

- 1) Barthes, R.: *Le Bruissement de la Langue*. 花輪光訳「言語のざわめき」, みすず書房, 1977年, p. 42~58.
- 2) これについては, バルトの「作品からテキストへ」という論文を参照のこと. *De l'oeuvre au texte*, 花輪光訳「物語の構造分析」, みすず書房, 1979年.
- 3) Barthes, R.: *Theorie du Texte*, in *Encyclopaedia universalis* Vol. 15, 1973. 花輪光訳「テキスト, その理論」, 青土社, 「現代思想」1981年7月号.
- 4) *Ibid.*, p. 77. 5) *Ibid.*, p. 78.
- 6) *Ibid.*, p. 78. 7) *Ibid.*, p. 80.
- 8) *Ibid.*, p. 80. 9) *Ibid.*, p. 80.
- 10) 花輪光氏の邦訳では「意味形成性」となっているが, ここでは, 丸山圭三郎氏の訳に従う.
- 11) Barthes, *op. cit.*, p. 81.
- 12) *Ibid.*, p. 81. 13) *Ibid.*, p. 81.
- 14) 丸山圭三郎「メタファーとメトニミー」, 講座「20世紀の美術」第九巻, 芸術の理論, 岩波書店, 1990年.
- 15) Barthes, *op. cit.*, p. 81.
- 16) *Ibid.*, p. 82. 17) *Ibid.*, p. 82.
- 18) *Ibid.*, p. 82.
- 19) 丸山圭三郎, 前掲書 p. 151.
- 20) Barthes, *op. cit.*, p. 82.
- 21) *Ibid.*, p. 82. 22) *Ibid.*, p. 82.
- 23) *Ibid.*, p. 83. 24) *Ibid.*, p. 83.
- 25) *Ibid.*, p. 83. 26) *Ibid.*, p. 83.
- 27) *Ibid.*, p. 83. 28) *Ibid.*, p. 83.
- 29) *Ibid.*, p. 83. 30) *Ibid.*, p. 83.
- 31) *Ibid.*, p. 83. また, Kristeva, J.: *Semiotike, Recherches pour une sémanalyse*, 1969. 原田邦夫訳, 「記号の解体学」, せりか書房, 1983年. も参照.
- 32) *Ibid.*, p. 83. 33) *Ibid.*, p. 84.
- 34) *Ibid.*, p. 84. 35) *Ibid.*, p. 84.
- 36) *Ibid.*, p. 84. 37) *Ibid.*, p. 84.
- 38) *Ibid.*, p. 84. 39) *Ibid.*, p. 84.
- 40) *Ibid.*, p. 85. 41) *Ibid.*, p. 85.
- 42) 生理的「欲求」や文化的「欲望」に対するものとしての「欲動」(Trieb, pulsion) 概念については, 丸山圭三郎「欲動」, 弘文堂, 1989年. を参照のこと.
- 43) Barthes, *op. cit.*, p. 85.
- 44) *Ibid.*, p. 86. 45) *Ibid.*, p. 87-88.
- 46) *Ibid.*, p. 88. 47) *Ibid.*, p. 88.
- 48) *Ibid.*, p. 88. 49) *Ibid.*, p. 88.
- 50) *Ibid.*, p. 89. 51) *Ibid.*, p. 89.
- 52) *Ibid.*, p. 90. 53) *Ibid.*, p. 90.
- 54) *Ibid.*, p. 90. 55) *Ibid.*, p. 90.
- 56) *Ibid.*, p. 91. 57) *Ibid.*, p. 91.
- 58) 「読むこと」の創造性については, 丸山圭三郎「欲望のウロポロス」, 勁草書房, 1985年. p. 33-35. 及び, 「フェティシズムと快楽」, 紀伊国屋書店, 1986年, p. 126-158. 及び「ソシユールを読む」, 岩波書店, 1983年. p. 24-27. 等を参照